インフィニットストラトス～二人目のイレギュラー～

暇人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

インフィニットストラトス～二人目のイレギュラー～

【Ｎコード】

Ｎ１７８４Ｗ

【作者名】

暇人

【あらすじ】

２人目の男のＩＳ操縦者立花蒼介（たちばなそうすけ）はＩＳ学園にやって来る。彼は軍人で相当の権力者である。これは、そいつを主人公にした物語。処女作なので駄文ですがよろしくお願いいたします。

ＩＳ学園初日（前書き）

初めてなので、駄文ですがよろしくお願いします。

ＩＳ学園初日

ＩＳ学園
そこは、ＩＳ（インフィニットストラトス）操縦者を育成する学校だ。
ＩＳとは篠ノ之束が開発したマルチパワードスーツだ。
そして、ＩＳは女にしか使えない。
俺は今からそこに向かっている。
何故か？
動かせるからだよＩＳを。
自己紹介が遅れたな俺の名前は立花蒼介（たちばなそうすけ）だ。
そして、
「隊長！学園が見えてきましたよ～」
と窓の外を見てはしゃいでるのは月島瀬奈（つきしませな）だ。
さて、隊長という言葉で分かるように俺は軍人だ。
地位は中将で上から４番目だ。瀬奈は中尉だ。
「ああ、そうだな」
と相槌をうってると目的地が見えてきた。
俺の服装は腰にグロック１８と脇に軍用ナイフ（形はバイオ４のレオンが使ってるナイフ）とポケットにバタフライナイフといった装備だ。
瀬奈は腰にベレッタｍ９２と脇に軍用ナイフといった装備だ。
移動手段は軍用ヘリ。
そうこう考えているうちに目的地に到着した。
ヘリから降りると、いきなり
「お前らが立花と月島だな。」
黒スーツの女性が話しかけてきた。
「ええ、そうですよ。」
と言うと
「私の名前は織斑千冬だ。今日からお前らの先生だ。

お前らの教室は一年一組だ、ついてこい。」
と言われると俺たちは教室へ向かった。

場所は変わって教室。
「ええ～今日は転校生が2人います。」
と言っているのは副担任の山田真耶という先生だ。
すると教室は騒ぎだした。
俺はもう帰りたいが、
「静かにしろ。それじゃあ2人とも入ってこい。」
無理なようだ。
俺は腹をくくって教室に入った。
教室に入ると女子だらけで嫌気がさすが、
男が1人いるので少しはましだが、やはり辛い。
「それじゃあ自己紹介をしろ。」
まず俺からするか。
「俺の名前は立花蒼介だ。
嫌いなやつは女尊男卑の社会だからといって偉そうにする女だ。よろしく。」
挨拶が終わると、いきなり

「「「「「キャーーーーーー」」」」」
なんだこれは！耳が痛い！新手の兵器か！とか思ってると
「静かにしろ、まだ自己紹介は終わってない」
流石だ一発で静まった。
すると瀬奈が挨拶をする
「月島瀬奈です。趣味は読書です。よろしくお願いします。」
「立花の席は二列めの一番後ろだ、月島はその隣だ。
これでＨＲを終わりにするぞ。」
休み時間になると女子がたくさん来て質問してくるので適当に捌いてると、
男が来た。
「俺は織斑一夏。一夏でいいぞ。よろしくな。」
「ああ、俺のことも好きに呼んでくれ。よろしく。」
その後、明らかに一夏の事が好きな女子が４人来た。
そういうのも適当に捌いてると休み時間が終わり、
放課後になった。先生に鍵を貰い俺は寮に向い、
寮に着くと俺はベットにＤＩＶＥした。時刻は午後４時
ちなみに瀬奈と相部屋だ。少しダラダラしてると
瀬奈が帰ってきた。
「ただいま～隊長～」
「おかえり、あまり隊長とか言うなって言ったろ～」
「あははそうでしたね。」
確か夕食の時間は６～７時の間だったはずだったら二時間ある。
「今から寝るから６時ぐらいに起こしてくれ。」
「はい、わかりました。ごゆっくり～」
俺は一瞬で寝た。

二時間後
ドォーーーン
というドラの音で眼が覚めた。
反射で軍用ナイフを構えてしまった。
「起きましたか？」
笑顔だ。むかつく
「ああ（怒）それよりそれどっから出した。」
「そんなことより、ご飯食べに行きましょう。
食堂の場所わかりますから。」
そんなことではないのだが、飯の方が重要だ。
「ああ、案内頼むぜ中尉。」
「了解です隊長。」

食堂では大したことは無く、ＩＳ学園初日は終了した。
確か臨海学校が近いらしいから、明日瀬奈と水着を買いに行くか。
臨海学校は俺達の専用機を使わないで済むといいな。
というのがＩＳ学園初日の様子だ。

ＩＳ学園初日（後書き）

感想よろしくお願いします。

オリキャラ紹介（前書き）

不定期掲載ですが、よろしくお願いします。

オリキャラ紹介

オリキャラ紹介

立花蒼介
身長　１８０ｃｍ以上１９０ｃｍ以下
体重　７０～８０ｋｇぐらい
専用ＩＳ　黒天『こくてん』
待機形態　　黒いロザリオ
見た目　髪は黒　目は金色　姿は、ａｎｇｅｌ　ｂｅａｔｓの音無
苦手なもの　　暑さ、騒がしいやつ
補足　　彼は二年前に研究所に囚われて体内にナノマシンを入れられているせいで
　　目が金色である。その研究所は本人がＩＳで破壊尽くしたので今は無い。
　　その姿を軍に見られて軍に入隊。入隊したときからすでに准尉という
　　大抜擢。二年間で中将にまで昇進した。
　　軍隊名はアメリカ陸軍日本部隊。そこの隊長。
怒るとヤバイ。

月島瀬奈
身長　１６５ｃｍ
体重　消えてる
見た目　髪はエメラルドグリーン、目も似たような色　　姿は緋弾のアリアのエル・ワトソン
専用ＩＳ　白蓮『はくれん』
待機形態　白いイヤリング
苦手なもの　怒った隊長、暑さ
補足　彼女は別の研究所で囚われていて、そこで蒼介率いる部隊が救出
　　実験の影響で髪と目の色が変わってしまった。
普段は軽いがやる　　ときはやる性格。小食で甘い物好きで時々お茶目な一面を持ったり　　持たなかったりする。

オリキャラ紹介（後書き）

よろしくお願いします。

とある休日と臨海学校（前書き）

更新遅れました。

とある休日と臨海学校

「さて、現在の状況を教えてくれ。」
「了解、現在織斑はデュノアと手を繋いでいます。」
やあ、主人公こと立花蒼介だ。
今の状況を説明すると、俺と瀬奈は水着買いにショッピングモールに行く最中に二人を発見。
面白いことがありそうだから現在尾行中である。後ろからも似たようなやつがいるが、気にしないで行こう。
「なるほど、写真でも撮っておくか。頼んだ。」
「はい。」
カシャ。
よし、これをクラスのやつに見せれば面白いことになりそうだ。
「蒼介君何か悪い顔してるよ。」
気のせいだろう。
「む、分かれたぞ。インカム渡すからデュノアを見張っててくれ。俺は織斑を尾行する。」
「了解です。」
インカムを渡しながら言うと、織斑が移動した。急がなければ。
・
・
・
尾行すると水着売り場に着いた。せっかくだし、俺も水着を買うか。
「蒼介君、デュノアが移動しません。」
なんだと！どういうことだ。
「わかった、そのまま見張っててくれ。」
「了解。」
何だろう休日なのに休んでる気がしない。

「さて、尾行を続けなければ。」
俺は織斑を尾行し、再び分かれた場所に戻る。
インカムを互いに外しながら二人の会話を聞いてると
「あれ？早いな、もう買い物終わったのか？」
「あ、ううん。ちょっとね、一夏に選んでほしいなぁって思って。」
「そうなのか。じゃあ実物を見に行くか。」
と言う会話が聞こえたよ。
よし。
「あとは頼んだ瀬奈。」
「何言ってるんですか。行きますよ。あっ、ついでに私の水着選びを手伝って下さい。」
なんだと！それは流石にまずいと思うんだが。
まあいい、俺も腹をくくろう。
そうこうしてると、女物の売り場に着いた。
「蒼介君、これなんてどう？」
見せてきたのは髪と同じ色のエメラルドグリーンの水着だった。
「良いんじゃないか。」
「わかりました、じゃあこれを買ってきます。」
さて、俺は観察でもってええー！！
試着室二人で入っちゃったよ！
これは、いいネタだ。
「買ってきましたーって蒼介君、また悪い顔してますよ。」
さて、なんのことやら。
あっ、織斑先生だ。逃げよ。
「瀬奈逃げるぞ。」
「はいっ！」
逃げ際に、ボーデヴィッヒとオルコットが見えた。
あいつ等が尾けてたのか。

「海っ！見えたぁっ！」
クラスの女子が声を上げて目を覚ます。
「んだよ。人が寝てるのに。」
って海かよ、嫌なんだよなー暑いの。
「海ですよ。蒼介君、テンション上がりませんか？」
「上がんねーって。暑いの苦手なんだよ俺は。」
おかしいな瀬奈も暑いのは苦手なはず。
「あー憂鬱だ。」
あの熱気をまともに浴びたら俺は干からびるね。
「俺、生きて帰れるかな？」
「おい蒼介、そんなこと言うなよ。」
後ろにいる一夏が言ってきた。
「そんなことだと・・・一夏、貴様合宿所に着くまでに遺書を書いておけ。」
俺にとっては死活問題なんだよ。
「すいませんでした！！」
「さすがに殺人マズイと思うよ。」
ちっ、しょうがないから許してやるか。
「瀬奈に感謝しろよ。」
「助かった～。」
一夏が言ってるが、どうでもいい。
さて、合宿所に着いた。

織斑先生が女将さんと話してる。
「織斑一夏です。よろしくお願いします。」
おっと、俺も挨拶をしなければ。
「立花蒼介です。よろしくお願いします。」
「こちらこそよろしくお願いします。」
女将さんが深々と頭を下げて挨拶してる。
「そうくん～そうくんは部屋どこ？」
この呼び方は布仏か。
「さあ、載ってないんだよ。最悪そっちの部屋で寝かしてくんね。」
「蒼介君、さすがにマズイでしょ。女子と寝るのは。」
瀬奈が言ってきた。
「冗談に決まってんだろ。」
いくら俺でもそんなことはしない。
「織斑、立花お前らの部屋はこっちだ。ついてこい。」
「了解。じゃーなー。」
俺は二人に別れを告げて先生の後をついて行った。
「織斑お前は私と、立花は山田先生とだ。」
「Ｒｅａｌｌｙ？」
「ああ、そうだ。」
正気か先生！
「俺と一夏でいいじゃあないですか！」
「お前ら二人で女子を防げるのか？」
「俺を誰だと思ってんすか？」
腐っても軍の中将だぞ。たかが女子の百や二百余裕だ。
「まあそうだが、もう決まったんだ。諦めろ。」
「Ｓｈｉｔ！！！！」
俺は膝をついて叫ぶ
「まあ、頑張れ。」
一夏が慰めの言葉を言うが、
「このやろう、そっちは家族だからいいけど、こっちは赤の他人で

しかも男と女だぞ。おかしいだろ。」
ちくしょう。こうなったら野宿でもするしか。
「どうしたんですか立花君？膝をついたりして？」
終わった・・・こうなりゃ自殺でもして
「だめですよ。自殺なんて。」
何！！なぜわかった。
「言葉に出てますよ。」
「わかりましたよ。覚悟を決めます。」
こうなりゃやけくそだ！！
「よし、それじゃあ早速海行こうぜ。」
「ああ・・・」
こうなりゃ倒れるまで泳いでやんぜ。

俺らの更衣室は1番奥だから、必ず女子の更衣室を通らなければならない。
ゆえに俺は廊下を全力ダッシュして更衣室まで行った。
そして、そっこうで着替えて海にダッシュ。
この間わずか1分にもみたない。そして、海に到着。
「我ながらなかなかの高タイムだ。」
空を見ながら言う。
やばい、暑くて死にそうだ。
一夏？置いて来ましたよ。
「そうくん～ビーチバレーしない？」
「布仏か、いいぜ。本気でやってやんよ」
へへへへ、超えられない壁というものを教えてやるぜ。
「蒼介君、悪い顔してますよ。」
「瀬奈か、ビーチバレーしようぜ。」
「いいですねしましょう。けど、どうしたんですかいきなり？」
こっちは二人でそっちは三人。

まぁ俺が男だから、それくらいのハンデでいいだよろ。
「よっしゃ！始めんぞ布仏！」
「あれ？シカト？！」
瀬奈が何か言ってるが気にしないで行こう。
五分後
「ビーチバレーか。いいなって何これ何で皆倒れてんの？」
そこには、俺達が完膚なきままに倒した自称七月のサマーデビル達がいた。
「まったくこの程度で悪魔だと笑わせないでほしい。」
ちなみに試合結果は全てラブゲーム。俗に言う圧勝だ。
「一夏じゃないか！お前も殺ろうぜ！」
「漢字が違くないか！まあいい、ニ対ニでやるか。」
よし！超えられない壁というものを教えてやるぜ。
「よっしゃ！逝くぞ！！」
「「「だから、漢字が違うって！！」」」
あれ？皆に言われた。まあいいや。
なんだかんだで5分後
「やはりその程度か、残念だ。」
「蒼介君アタック強すぎじゃないですか？織斑君腕真っ赤ですよ。」
「大丈夫？一夏！！」
「大丈夫だ、シャル。しかし強いなたった三点しかとれなかったぞ。」
「二人で三点取ったんだ。そっちの三人の悪魔達は一点もとれなかったぞ。」
余裕すぎたぜ。もっと俺を楽しませてくれ？
「強すぎだろ・・・」
一夏が何か言ってるが気にしない。
「さて、瀬奈飯でも食いに行こうぜ。」
確か食事はいつでも良かった筈。
「そうですね、行きましょう。」

食事後俺は瀬奈と遠泳の勝負をした。
十キロ泳いで俺が負けた。
　憂さ晴らしにナノマシンを使って海を叩き割った。
５０メートルぐらい割ったので、皆に見られちまったが何とかごまかした。
さて、今は専用機持ちを集めている。ついさっきボーデヴィッヒが来て何か言ってたが、よく分からない。
何？コア・ネットワークって？とか思ってると
「ちーちゃーん」
とか言って凄い勢いで人が走って来た。
やばい、変人臭がする。
何？織斑先生のアイアンクローを抜け出しただと！
「束、挨拶ぐらいしろ。」
「私が天才の束さんだよ～」
「誰だ束さんって？」
俺が言うと
「「「「「「は・・・・？」」」」」」
「えっ・・私を知らないの？・・・・」
「えっ、そんな驚くこと？」
世間では常識なのか？
「蒼介君・・篠ノ之束さんはＩＳを作った人ですよ。」
「マジかよ、俺は知らずに使ってたのかよ。」
地味にショックだ。皆が知ってることを俺が知らなかったなんて。
「あれ？何で君がここに居るの？男はいっくんしか使えない筈だけど」
「あれですよ。俗に言う裏口入学ですよ。」
「嘘をつくな立花。お前も使えるからここに居るんだろうが。」
さて、なんのことやら。
「そういや何で蒼介がここに居るんだ？ここは専用機持ちしか招集されてないはずだが？」

「専用機を持ってるからに決まってんだろ・・・」
えっ？そうなのとか言ってるが俺には聞こえない。
もう軍に帰りたい（泣）
「へえ～そうなんだ。君のＩＳも見せてよ。」
もうなんにでもなれ。専用機のことは秘密だったのに・・・
「はい・・・いいっすよ・・・・」
俺は黒天を展開する。
「落ち込んでるところ悪いけど、えいっ（ぷすっ」
「うん、やっぱ見たことのないパターンだね。」
「そっすか・・・・」
「お前いつまで落ち込んでんだよ。」
「暫くほっといて。」
すると、束さんが
「ほーい、終わったよー。」
「あっ、どうも～。」
暫くボーっとしてると、山田先生が慌てた様子で織斑先生とはなしてる。
すると、織斑先生が
「現時刻よりＩＳ学園教員は特殊任務へと移る。今日のテスト稼働は中止。各班、ＩＳを片付けて旅館に戻れ。連絡があるまで各自室待機すること。以上だ！」
何があったんだ？
「専用機持ちは全員集合しろ！織斑、オルコット、デュノア、ボーデヴィッヒ、凰、立花、月島！それと、篠ノ之も来い。」

「では、現状を説明する。」
風花の間では教師と専用機持ちが集められていた。
「二時間前、ハワイ沖で試験稼働にあったアメリカ・イスラエル共同開発の第三世代型の軍用ＩＳ『銀の福音』が制御下を離れて暴走。監視空域より離脱したとの連絡があった。」

なんだと！と俺が驚いてると話が進んでいた。
「よし。では本作戦では織斑・篠ノ之の両名による目標の追跡及び撃墜を目的とする。作戦開始は３０分後。各員ただちに準備にかかれ。」
と聞こえたので俺は
「正気か先生？今回の作戦は実戦だ、訓練ではない。しかも敵は軍用ＩＳ。こんなのただの自殺行為だ。」
「おい、どうしたんだ蒼介？」
「もう作戦は決まった。異論は認めない。」
「そうかよ。なら俺は部屋に帰らせてもらいますか。」
「おいっ、待て。」
俺は先生の静止を聞かずに部屋をでた。
「先生、私も部屋に帰らせて頂きます。」
そう言ったのは瀬奈だった。
「それでは。」
同じく静止を聞かずに出て行った。
「待って下さい隊長～」

「ん？瀬奈か。お前もか？」
「はい。隊長は部屋に行くんですよね？なら私も一緒に行っていいですか？」
「いいぜ、どうせ断っても来るんだろ。」
俺は部屋に入ると寝転がり
「瀬奈、悪いが見張りを頼めるか？俺は少し寝る。」
「わかりました。」
さて、寝るか。

何かうるさいな。
「瀬奈、少し表に出てくる。あのＩＳのことを調べてくれ。」
「わかりました。」
俺は部屋を出ると近くに居た女子に声をかけた。
「何かあったの？」
「あっ、立花君。実は織斑君が怪我して意識が無いんだって。」
「そうかありがとう、このことは俺が調べておくよ。」
「あっ、うん。」
俺はクラスメイトに別れを言って先生の声が聞こえる部屋に入った。
「これはどういうことですか？織斑先生？」
「立花、部屋に戻れ。」
「先生がちゃんと話してくれたら戻りますよ。」
先生は暫く黙った後
「織斑が墜とされた。」
やっぱりな。
「俺はちゃんと忠告しました。その結果がこれですか。」

先生は黙ってる。
「もういいです。この件は俺達でかたずけます。それでは。」
ｐｒｒｒｒ
瀬奈から電話だ。
「何だ？」
「暴走したＩＳを見つけました。」
「よし、今から出撃する。５分以内に準備をして海岸に来い。俺達でこの件を処理する。」
「わかりました。すぐに向かいます。」

さぁーて久々に暴れるぜ～

とある休日と臨海学校（後書き）

感想お願いします。

ＩＳ説明

立花蒼介専用機「黒天」

見た目　　ブルーティアーズのスカート部分を無くし、ファンネルっぽいもの数を６つにしたかんじ。

武装　　２丁拳銃　、ショットガン（セミオート）、バレッドＭ８２のＩＳ版通称メタルイーター（とあるに出てきたのと同じ。）　長刀（セフィロスと同じようなもの）、ファンネルっぽいもの、　エネルギー吸収シールド型バリア及びシールド。

世代　　第三世代

特徴　　第三世代最強の攻撃力を持ち、最速のスピードを持っている。

月島瀬奈専用機「白蓮」

見た目　ガンダムデュナメスの股と頭と胸の部分を無くしたかんじ。

武装　アサルトライフル、サブマシンガン、両肩のエネルギーと実弾を無効果ににする大型シールド
スナイパーライフル、機関銃。

世代　第三世代

特徴　第三世代最強の防御力を持ち、最大のエネルギーを持っている。

銀の福音戦～始まりと終結～（前書き）

戦闘描写が上手く書けません。

銀の福音戦～始まりと終結～

場所は海岸。
俺は瀬奈と最終打ち合わせを終えて出撃の準備に入った。
「いいか、今回はいつもどうりに俺が突っ込むから、お前がバックアップだ。行くぞ！」
「はいっ！」
『展開』
心の中でそう言うと俺の体は光に包まれた。
「よし。敵はここから３０キロのの地点にいるんだな？」
「はい、そうです。」
「それでは行くぞ！」
・
・　・　・
・
海上２００メートル。そこで停止していた『銀の福音』は不意に顔を上げる。
次の瞬間、超音速で飛んで行った瀬奈の弾丸。三キロも離れてると大した威力にはならないな。
（ｃａｌｌ……）
俺は長さ3メートルは軽くある長刀を呼び出した。
『ＩＳ５機が接近してます。』
この声は俺のＩＳに搭載されているＡＩ。姿は某緑髪のツインテールのボーカロイドだ。名前も同じ。
そうしてるとＩＳが来た。
来たのは一夏のヒロイン達。
「瀬奈、ここは頼んだ。誰一人として通すな。」

「わかりました。」
そうして俺はその場を去った。
『銀の福音近づいて来ます。』
俺は超音速で接近して来た福音をすれ違いざまに長刀で斬りつけた。
ギィン
『敵ＩＳ方翼半壊。』
福音は急旋回してこちらに向かって来た。
『Ｌａ♪』
福音はエネルギー弾を大量に撃ってきた。
「エネルギー吸収シールド展開。」
俺の左腕にシールドが展開された。
エネルギーを吸収しながら福音との距離を詰める。
俺と福音との距離は１．５メートル。この距離が１番長刀を使いやすい距離だ。
「ふっ！」
俺は一息で６回福音を斬りつけると、福音は両方の翼を失い、装甲はズタズタになって海に墜ちた。
「この程度か。」
まだ戦いが始まってから５分ぐらいしか経ってない。
ズドォーン
水飛沫を上げてエネルギーの翼を纏った福音が現れた。
「第二形態移行か。良いね、こうもあっという間だと面白くないからな。もっとお前の苦痛に悶える姿を見さしてくれよ！」

その頃瀬奈は篠ノ之、オルコット、デュノア、ボーデヴィッヒ、凰の5人とエンカウントしていた。

「どけ、月島。」
ボーデヴィッヒが言うと
「どきませんよ。どうしてもと言うなら力ずくで通ってください。」
「ならば、そうしてやる。」
ボーデヴィッヒはレールカノンを撃つが
ガキン
ギィン
瀬奈は両肩の巨大なシールドを正面で合体させて弾丸を防いだ。
「そんな攻撃で倒そうなんて10年早いですね。」
「時間がない、多対一でやらさせてもらう。」
ボーデヴィッヒが言うと
「むしろそうでないと只の虐殺になってしまいますからね。かかって来なさい」
「「「「「上等」」」」」
瀬奈は突っ込んで来た5人を上手く躱しながら両手に持ったサブマシンガンとアサルトライフルで地道に5人のエネルギーを削っていく。
「くそっ。当たらない」
5人が集中力を無くして動きが粗雑になったところで、瀬奈は普段は反動が強すぎて使わない隠し兵器の機関銃を呼び出す。
「終わりです。」
この機関銃はマガジンなど無くて直接弾を装填するタイプなので、無限に撃てる。

ズガガガガガガガガガ
弾丸の雨が5人に直撃。
その後5人は動かなくなった。
その時、白式の第二形態雪羅を纏った織斑一夏がやって来た。
「月島！お前何してんだ！！」
「ただ、動けなくしただけです。死んでませんよ。安心して下さい。」
「ふざけんな！何でこなことしたんだ？」
「そんなこと、そこに寝ている彼女達に聞いたらどうです？」
「そこを通せ。」
「通りたかったら、力ずくで通るんですね。」

その時、俺は第二形態になった福音と戦っている。
だが、それは他人から見たらただの虐殺にしか見えない状態だった。
「これで終わり。」
ギィン
縦に一閃。その攻撃で福音は完全に動きを止めた。
俺はその機体を持って
「さて、さっさと帰るか。」

乗ってるやつは意識がないな。
よし、一夏が助けたように記憶をナノマシンで書き換えよう。
よしっ書き換え終わった。
俺はできるだけ早く瀬奈がいるところに戻った。

瀬奈が誰かと戦っているのがみえる。
メタルイーターを二人の間に撃って
プライベートチャンネルで瀬奈に話す。
「「誰だ？」」
「終わったぞ。あと、一夏のやつ何？」
「お疲れさまです。あと、あの機体はおそらく、白式の第二形態だと思います。」
「なるほど、あっそうだ、一夏これあげる。」
俺はそう言って一夏に福音を渡した。
「何のつもりだ。」
「そいつの記憶じゃお前が倒したことになってるから、頑張れ。」
「どういうことだ？うっ！」
俺は瞬間加速で一夏の背後に回って頭を鷲掴みにしてナノマシンで記憶を書き換えた。
それと、倒れてる5人の記憶も書き換えた。
ちなみに書き換えた内容は原作と同じ感じ。
実際、こんなにナノマシン使うと辛いんだけど、まあいいや。
俺らは六人を抱えて帰った。

「作戦完了と言いたいところだが、お前たちは独自行動ひより重大な違反を犯した。帰ったらすぐ反省文の提出と懲罰用の特別トレーニングを用意してやるから、そのつもりでいろ。
「はい……」
という声が聞こえた。
ちなみに俺は廊下で盗み聞きとやらをしている。
すると
「「「「「「とっとと出てけ！」」」」」」
という声を聞くと、一夏が出て来た。
一夏は深く息を吐いたて
「おう蒼介か。いきなりだけどさ、仲間を、守れたよな。俺は。」
「守れたんじゃねーの」
まあ、これはこれで良かったのかもしれないな。

夕食時一夏達は相変わらず騒がしかった。
何でだろう篠ノ之が来たら急に感じが変わった。
「おい瀬奈、あの二人感じが変なんだが理由知らない？」
俺は隣にいる瀬奈に聞く。
「さあ、起きた後に何かしたんじゃないですか？」
何だろう？なぜか面白いことが起きる予感がする。
「瀬奈、飯食い終わったら一夏を尾けるぞ。面白いことが起きる予感がする。」
「なぜ分かるんでしょうか？」
気にしたら負けだと思う。
さて、移動するぞ。

場所は海岸。
俺らは高台の方にいるので、見下ろしてる感じになる。
それはちょうど一夏が篠ノ之とキスをしようとするところだった。
そして、４人の一夏の彼女候補達が一夏を狙っている。
まさに修羅場。
「ははは、修羅場だ。いやー来て良かった。お前はどう思う。」
「あれはですね（ブフッ、完璧な修羅場ですよ。」
いやー良いもの見れた。

翌朝。朝食を終えて、すぐにＩＳ及び専用装備の撤収作業に当たる。
十時を過ぎたところで作業は終了。今はバスにいる。
俺の席は一夏の前なので、会話は全て聞こえる。
すると一夏が
「すまん……誰か飲み物持ってないか？」
すると
「……ツバでも飲んでいろ。」
とボーデヴィッヒ。
「知りませんわ。」

とオルコット。
「あるけどあげない。」
とデュノア。
俺は下を向いて必死に笑いを堪えている。
すると
「なっ……何を見ているか！」
という声と殴ったような音を聞こえてくるので、俺は笑いを堪えのが大変だった。
すると

「「「「「い、一夏っ」」」」」
という4人の声が聞こえた。すると
「ねぇ、織斑一夏くんっているかしら？」
「あ、はい。俺ですけど。」
誰だこいつ？
考えてるとナターシャという名前とちゅっというのが聞こえた。
すると
「浮気者め」
「一夏ってモテるねえ。」
「本当に、行く先々で幸せいっぱいのようですわね。」
「はっはっはっ」
ちょっと待て、最初のおかしくない？
「「「「はい、どうぞ！」」」」」
ペットボトルが投げつけられたのを見ると、俺は耐えきれずに笑ってしまった。
その後織斑先生の一喝でおとなしくなれた。死ぬかと思った。
臨海学校の次は何があるのかな？楽しみだ。

銀の福音戦～始まりと終結～（後書き）

何か悪ふざけで原作と違うふうにしてしまって申し訳ないです。
次からは原作と同じふうにしていくつもりです。

とある休日（前書き）

遅くなりました。
ところで、ＩＳ　８巻早く出て欲しいですね。
正直、この話はとばしてください。超駄文です。
覚えて欲しいのはこの話で主人公が頭に怪我を負ってこれから暫く
一方通行と同じ杖を使って生活していくということだけです。

とある休日

皆さんこんにちは。立花蒼介です。
俺は今車で移動中だ。どこか？そこは
「隊長～そろそろ着きますよ。」
遮んな。まあ軍だ。何でかを説明には少し時間を遡る必要がある。
というわ訳で三時間前～

三時間前
Ｐｒｒｒｒｒｒｒｒｒｒｒｒｒｒｒｒｒ
「何だよこんな朝早くに。誰だ？」
電話に出ると
「隊長！早く来てください。今日は会議の日ですよ。迎えは門前にいるので。」
ヤバイ！今は午前7時、会議は午前8時、ここから車で30分。ピ

ンチだ。
「うおおおおお！！！」
俺は着替えて、携帯を持ち、ＩＳを装着し、カロリーメイト（チョコ）を食い、門までダッシュ。
門に到着。そのまま車に乗り込む。ちなみに服装は灰色のズボンに黒のＴシャツだ。
「遅いですよ、隊長。」
そう言うのは隊員のセレナ。見た目は緋アリのジャンヌ、性格は全然違う。
「悪いな。急いでくれ。」
「了解♪」

という訳で今に至る。
「到着♪」
「サンキュー、助かった。」
今は7時半余裕だ。
早速部屋に行くか。

さて、今は8時。そろそろだな。
『さて、会議を始めようか。』
おっ来た来た。
「ああ、それで今日は何の用だ？」
『銀の福音の件は悪かったな。』
「まったく、そっちがちゃんとしていれば俺が動かなくて済んだの

に。」
『ああ、ところで、織斑一夏について報告を。』
「あいつは、ただの鈍感でバカやつだ。」
『そうか、ならもう会議は終わりだ。悪かったな時間を取らせて。』
「全くだ、じゃあな。」
俺はそう言って通信を切った。くだらないことで呼なよ本当に。
久しぶりだから訓練所に行くか。

場所は変わって訓練所
「お帰りなさい、隊長」
こう言うのは副隊長の間宮有紗。見た目は緋アリの星伽白雪。性格はセレナの軽い感じとは真逆のしっかりした感じだ。年は２０。セレナ同じ。
俺は軽く訓練の様子を見て帰った。

ＩＳ　学園の寮
時刻は昼食の時間。
俺は食堂にいく最中に足を滑らせ後頭部を強打。
けっこう痛い。立って歩こうとすると倒れてしまう。
「どうなってんだ？ここは部屋だし杖でも作って、飯食ってから病院に行くか。」
ナノマシンで傷は治るのに。まあ、脳は死亡判定出ないと治らないけど。
五分後
杖完成。形は禁書に出てくるやつ。
よし、用事を済ませるか。

はい、疲れたが病院び行って来ました。
何か脳にダメージを負って2ヶ月は杖で生活します。ＩＳ　も使えません。
あ～あ憂鬱だ。
これが俺の夏休みの思い出。
意外とつまらなかった。（泣）

とある休日（後書き）

短くてすいません。次から5巻の内容です。
あと、お気に入り登録してくれる人ありがとうございます。

夏休み明け初日（前書き）

学校の文化祭だるい。
最近デビルメイクライ４にはまってます。
ブルーローズって拳銃かっこいいですよね。

夏休み明け初日

「でやあああああっ！！」
ギィン
夏休み明け最初の実戦訓練はクラス代表どうしで戦っている。
見ると一夏はシールドエネルギーがもう無く、凰がかなり優勢だ。
とか言ってるうちに一夏が負けた。弱いな本当に。

「何でお前は俺を昼飯に誘うんだ？」
今は食堂でメンバーは一夏のハーレムｗｉｔｈ俺と言った状況だ。
ちなみに瀬奈はクラスの女子と一緒にいる。
「なんでってお前最近一人だろ。だから。」
そんな理由でお前はこの修羅場に呼んだというのか！
しかも杖だから逃げれないし。
「まあいい、俺も男だ。おとなしく諦めよう。」
幸い俺が頼んだのはサンドイッチ。これなら早めに帰れる。
とか考えてると
「ま、まあ、アレだな！そんな問題も私と組めば解決だな。」
篠ノ之が言っちまうと
「何を難しい顔をしているか。お前は私の嫁だろう。故に私と組め。

」
何故に一夏が嫁？普通婿じゃね？
つーかヤバイ。修羅場になる。
さっさと食う。多少空気になるが、大丈夫だ、問題ない。
「んー・・・・・・・・でもなあ、最近ペア参加のトーナメントとかないしなぁ。」
「いきなりあるかもしれないでしょうが。」
「そのときは・・・・シャルと組むかもなぁ。」
「へっ？僕！？」
おっ一夏ついにお前は本命を選ぶのか？
「え、えっと、ど、どうしてかな？」
挙動不審すぎだ。とか思ってると一夏が
「前に組んだから」
お前は相変わらずだな。夏休みで少しは変わると信じた俺がバカだった。
すると
「どうせそんなことだろうと思ってたよ・・・・・・・・・・。はあ・・・・・・・。」
デュノアが言うのをきっかけに
「外道だな、お前。」
「あんたってひどいわね・・・・・・。」
「女心をなんだと思っているのだ、まったく。」
「一夏さんの唐変木ぶりは時折許せませんわね。」
「シャルロット、カフェオレを奢ってやろう。だから気を持ち直せ。」
「あ、ありがとう、ラウラ。それとみんなも。」
さて、食い終わったし
「ごちそうさま、俺は先に行くぜ一夏。」
「ああ、わかった。」

時間が飛んで
今は午後の実習の時間なのだが、一夏がいないと思ったら来た
すると
「遅刻の言い訳は以上か？」
「いや、あの・・・・あのですね？だから、見知らぬ女生徒がー」
「ではその女子の名前を言ってみろ。」
「だ、だから！初対面ですってば。」
「ほう。お前は初対面の女子との会話を優先して、授業に遅れたのか。」
「ち、違っー」
「デュノア、ラビット・スイッチの実演をしろ。的はそこの馬鹿で構わん。」
デュノアを見ると、うわっ怖い笑みだ。
「それでは織斑先生、実演をはじめます。」
「おう。」
武器を構成していくデュノア。
死ぬな確実に。
「あ、あの、シャル・・・・・・・・・ロットさん？」
「なにかな、織斑くん？」
終わったな

「一夏、骨は拾ってやる。」
「ちょっ、おまー」
「はじめるよ、リヴァイヴ。」
「ま、待っー」
バララララッ！！
不幸だな、一夏。

翌日。ＳＨＲと一時限目の半分を使っての全校集会。
内容は、今月中程にある学園祭についてだ。
つーか姦しいな本当に。
「それでは、生徒会長から説明をさせていただきます。」
一気に静まる。やっと静かになった。
「やあみんな。おはよう。」
リボンからして二年生だな。
「さてさて、今年は色々と立て込んでいてちゃんとした挨拶がまだだったね。私の名前は更識楯無。君たち生徒の長よ。以後、よろし

く。」
遠慮させてくれ（笑）
めんどいので割愛
まとめると、学園祭で各部が一夏を景品にして競い合うってことだ。つーわけで、同日、教室にて放課後の特別ＨＲ。今はクラスの出し物を決めているがかったるいので、今は寮の部屋に居る。
俺は秘かに開発しているブレスレット型量子変換機を完成させたが、何もインストールしてないので今インストールしてる。
「よっしゃ！できたぜ。ついでに新しい武器を二つも作っちまったｗｗｗ」
インストールしたのは今まで持ってた武器と新武器の刀（形はＤＭＣ４のレッドクイーン）。
もう片方の新武器は銃（形はデビルメイクライ４のネロが持ってる銃）で単式と二連式に変えれるようにと、弾を装填している所に量子変換機を搭載して撃った瞬間に自動で弾を装填するので無限に撃てる。ちなみに、銃のほうはインストールしてない。ホルスターはベルト改造して銃は腰あたりにある。杖はそろそろ使わなくてもいいようになるので、右側に付けてても問題ない。
「さて、コンビニでも行ってくるか。」
割愛すると今は帰宅途中。
買ったのはカロリーメイトとかそんなん。
「やめてください。」
あん？
「いいじゃねーかよ、遊ぼうぜ。」
裏路地からだな見てみるか
見たら、同じ学校の（あたりまえだが）女子がチンピラに絡まれていた。
しゃーねーな助けるか。
「おい。嫌がってるからやめてやれよ。お前等じゃ無理だって。」
するとチンピラＡが

「うっせーな、てめぇには関係ねーだろーが。痛い目みたくなかったらかえりな。」
イラッ。殺そうかなこいつ等。
「やれるもんならやってみろ三下。」
「上等だコラ。」
チンピラAが素手で来たので、俺は持ってきたブレスレット型量子変換機で拳銃をコールして、相手に向けて両足を撃つ。
「ぎゃあああ！！」
「うっせーな、おい片割れ。こいつを連れてさっさと失せろ。」
するとチンピラBが
「はい、わかりました！」
そう言って夜の町に消えてった。
「おい、大丈夫か？」
拳銃をしまい。地面に置いたビニール袋を拾って杖をつきながら尋ねると
「はい、ありがとうございました。」
大丈夫そうだな。
「そうか、なら今度からは一人でこんな時間に来ないほうがいい。」
さて、帰るか。
「あのお礼をさせれください。」
「いらねーよ、さっさと寮に戻れ。」
俺も早く帰りたいんだ。
すると、
「あれその制服、もしかして立花君？」
もしかしなくてもそうなんだが、適当に答えて帰ろう。
「ああそうだ。さっさと帰ろうか。不安だったら俺も一緒に帰るがどうする？」
「じゃあ一緒に帰ろうか！」
ん？よく見たら、二年生じゃん。
「やべ、もう7時半だ飯食えないじゃん。」

「それなら一緒に食べようよ。さっきのお礼も含めて。」
おっ、ナイスだ先輩。いいかげん名前教えて。
道中割愛

食堂
時刻は7時４５分
「それじゃあ私はサンドイッチにするけど、同じでいい？」
「ああ、構わない。」
先輩相手でも普段と同じ口調。それが俺クオリティーｗｗ
「はい、どうぞ？」
「どうも。ところで、貴女の名前は？」
いいかげん教えやがれ。
「そういえば言ってなかったね、私は壽愛華（ことぶきあいか）よ。よろしく。」
「こちらこそ。・・・・・ごちそうさま、それでは壽先輩お休みなさい。」
食器を戻すと周りには誰もいない。
「さて、疲れた。もう寝よう。」
俺は近くの台に銃とブレスレットを置いて
寝間着に着替えてベットにＤＩＶＥ。
「お休み～」
誰もいないのに言う。
瀬奈がいないのは用事とかだろう。
というよりも、一夏の部屋が騒がしいが俺はもう寝る。
お休み～

夏休み明け初日（後書き）

新キャラでましたね。
感想よろしくお願いします。

文化祭１（前書き）

今回は短いです。

文化祭1

翌日の放課後、俺は第三アリアで瀬奈と一緒に練習をしている。最初は少し動きずらかったが、もうだいぶ慣れたので、
「瀬奈。もういい、終わりにするぞ」
「はい」
俺は練習を終わらせ、制服に着替えて女子の更衣室に行ってる最中に瀬奈にあった。
早っ！！俺と同じ位ってどんだけだよ．．．．．．
「さて、それでは久しぶりに一緒に夕食を食べましょうか」
「ああ、そうだな。あと、今日は助かった。感謝してる」
俺が礼を言うと、
「いえいえ。ちょうど私も練習したかったんで。」
本当に気の利く良い奴だよ。
そこら辺にはいないぜ。こんな（すばらしい）奴。
おっと、柄にも無い事を考えちまったな。
さっさと食堂に行くか。

食堂で夕飯を食った俺達が部屋に帰ると、瀬奈の友達が一斉に来たので、俺は一夏の部屋に逃げる。
「よう一夏。ちょっと部屋で暇潰させて～」
「ああ。いいぜ・・・・・・・」
参った。何か一夏が廃人になりそうだ。
いったい一夏に何があったんだ？
したら、
「ただいま～一夏君・・・・・・えーと、確か君は立花蒼介君だったよね」
「ああ、そうだが、誰だ？あんた」
謎も女が尋ねてきたので、返事をすると、
「私の名前は更識楯無。君たち生徒の長よ・・・・・って前に言った事があるんだけど」
・・・・・・・・・・・・・・記憶に無い。ここは素直に言うべきか、否か。いや、めんどいから言わなくていいか。
「何であんたがここに居るんだ？」
って尋ねたいが、どうせ一夏のリア充話だな。
「さて、俺はお邪魔みたいだな。じゃあな」
ちょっと待てー！！とか言ってるが聞こえん。
俺はその後、部屋に戻ると、一瞬で寝た。

数日後、今日はなんと文化祭（かったるいもの）の日だ。俺はかったるいので、サボろうとすると、「どこに行くんですか？」と素早く教室に連行された。逃がさないためなのか腕組んでるし。まったく、そういうのは好き

な男にやれよ・・・

そんなんで教室
教室に入ると、女子群が一斉に来て
「この服に着替えて」
って言うので断ろうとしたが、一夏が更衣室に連行された。
一夏、後で殺す。絶対殺す。何がなんでも殺す。
一夏に殺気を出しまくりながら、着替えをすませて教室に行くと、
「「「「「「「おおー！！」」」」」」」
何この歓声。帰りたいな～今すぐに。
「諦めろ？」
一夏が言ったのでとりあえず、ボディーブローで意識を落とすと少しだけスッキリした。
しかし、一夏をぶっ飛ばしても文化祭は無くならないので、諦めるしかないのか。

俺は一人めの客を接客し終えると、自分にこういうのが向いてないのが分かったので、教室を抜け出し、今は屋上。
やっとゆっくりできると思うと、なんか嬉しい。
あと、俺には抜け出しの才能がある事が分かった。
しばらく屋上で景色を眺めていると、誰かが階段を登ってる気配が

する。
俺はブルーローズを抜いて準備すると出て来たのは、
「こんな所でサボってたの？ダメだよサボっちゃ」
更識楯無だった。というかあんた人の事言えなくね？
「ほら、戻りましょ。私も一緒に行くから」
「お断りだ。行くなら一人で行け」
さて、俺は少し寝よう。
お休み、諸君。

文化祭１（後書き）

感想よろしくお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1784w/

インフィニットストラトス〜二人目のイレギュラー〜

2011年11月15日08時04分発行